

サプライコントローラ+DC電源

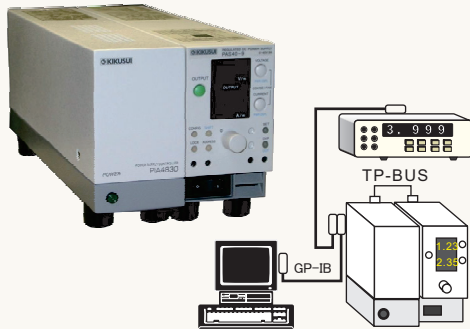
## PIA4830+PAS(1台)

使用できる機種 PIA4830,PASシリーズ

品番	GP-IBボード	価格	動作環境
W32-PIA48301-R	ラトックシステム	<b>75,000円</b>	Windows7/8.1/10 (32bit or 64bit) Excel2010/2013 2016/2019 (32bit Only)
W32-PIA48301-N	NI社		

PIA4830,PASシリーズは、菊水電子工業の商標です。

### 機能



・Excelシート上に入力したデータを読みながら、リアルタイムにDC電源装置を出力制御し、同時に測定も行います。

Excelシート上のデータ(Max65,000)を読みながらDC電源装置を指定したCV/CC制御モードで順次コントロールします。制御対象となるDC電源は、1台だけです。

各設定値での保持時間は自由に設定できます。

また同時に、電圧・電流の各リードバック値の読みや、マルチメータなどの外部測定器による測定も可能です。さらに、その読み値を判定し、出力を中断できます。同一の電源装置でCC制御とCV制御を混在して制御することはできません。

・多様な停止条件により、出力を停止できます。

例えば、二次電池の定電流充電を行なう場合、停止電圧値を設定しておけば、その電圧に到達した時、自動的に出力を停止します。

### 概要

DC電源を制御する電圧値、電流値などを事前にキーボードからExcelシートに入力しておきます。

本プログラムはExcel上のアドインとして動作します。Excel上から本アドインを起動すると、Excelシート上に、このウインドウが現われます。「START」ボタンでExcelシート上のデータに基づき連続制御を開始します。

装置のリードバック機能を使用し、制御と同期して、電圧・電流、または、外部マルチメータの測定値がExcelシートに取込まれます。これらのデータは、キーボードから入力したデータと同じように、Excelの機能を利用して、作図・編集・計算等を自由に行うことができます。  
注)本ソフトに自動作図機能はありません。

### 操作説明

#### スタート前に、Excelシートに制御データを入力します。

アドインを起動する前に、Excelシートに電圧・電流などの制御値を制御順序にあわせて入力しておきます。Excelシート上のどの位置に入力してもかまいませんが、制御と同時に測定値を取り込む場合は、入力した制御値の右側に測定値が入力されるため、制御値の入力位置は、Excelシートの左端に入力することをお勧めします。(下図参照)

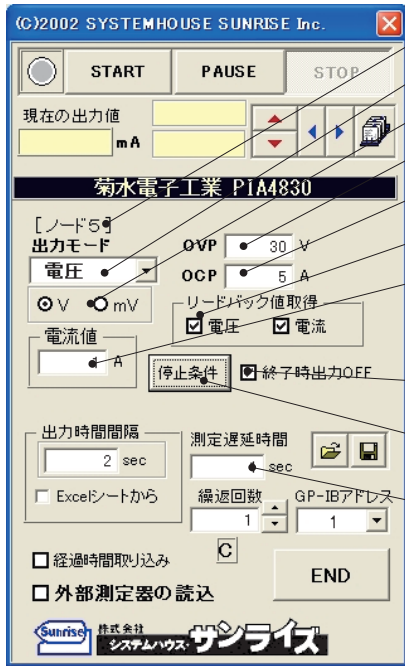
	①	②
1		
2	NODE-5	
3	出力電圧	時間間隔
4	3.5	1
5	0.8	1.5
6	0.7	2
7	0.8	1
8	0.9	2
9	1	
10	1.1	3
11	1.2	2
12	1.3	1
13	1.4	
14	1.3	
15	1.2	
16	1.1	1.9
17	1	1.8
18	0.9	
19	0.8	
20	0.7	
21	0.6	
22	0.5	
23		

① 左図にDC電源を制御する場合のExcelシートへの制御データの入力例を示します。機器の制御データをこの列に入力します。空欄のセルで制御を終了します。  
注)Excelに入力された値がDC電源装置に送信されると、DC電源装置が持つ有効桁に丸められます。従いまして、Excel上の値が、そのまま負荷装置の設定値にならない場合があります。

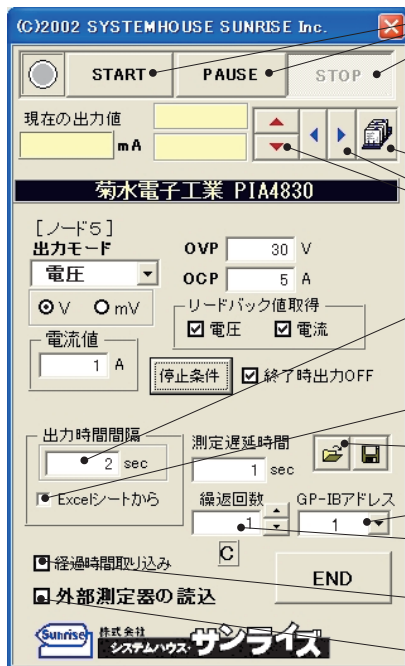
② 「出力時間間隔」欄の「Excelから」にチェックを付けた場合、この列に時間間隔(秒)を入力します。各ステップごとに異なった時間を入力できます。途中空欄があった場合、最後に有効だった時間値が継承されます。

必ずこの位置にカーソルを置いて、「START」をクリックします。

制御値の欄が空欄になると、制御を終了します。

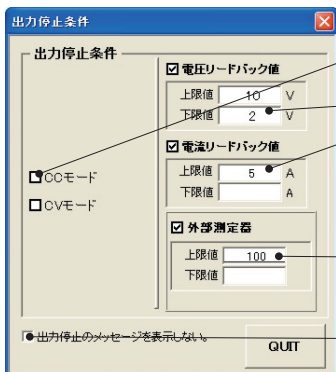


- PIA4830に接続した電源のノードは必ず「5」に設定してください。
- 出力モードを「電圧」「電流」から選択します。
- Excelシート上のデータの単位を指定します。
- OVP値を入力します。空欄の場合は、現在設定されているOVPを継承します。
- OCP値を入力します。空欄の場合は、現在設定されているOCP値を継承します。
- 制御中、DC電源のリードバック値をExcelシートに取得する場合はチェックを付けます。
- 出力モードが「電圧」の場合は、最大電流値を入力します。出力制御中、この電流値を超えると電源はCCモードに移行します。
- 出力モードが「電流」の場合は、最大電圧値を入力します。出力制御中、この電圧を超えると電源はCVモードに移行します。
- 空欄の場合は、現在の設定値が保持されます。
- 制御終了時、電源出力をOFFにする場合にチェックを付けます。チェックを付けない場合は、制御終了時、最後の出力値が出力されたままになります。
- 出力制御中、緊急停止する条件をノード毎に設定します。詳細は次ページを参照ください。
- 「測定遅延時間」は、DC電源に制御値を設定後、測定を開始するまでの遅延時間を入力します。もし、「出力時間間隔」より長い遅延時間が入力された場合は、測定は強制的に出力時間の末尾で行われます。また、「電圧」「電流」のどちらかの測定にチェックがある場合、強制的に0.5秒以上の遅延時間に設定されます。
- 「測定遅延時間」の欄が空欄の場合は、出力時間間隔の末尾で測定が行われます。
- 正確なリードバック電圧や電流を取得するためには、1秒以上の測定遅延時間を設定することをお勧めします。
- もっと高速にかつ正確に電圧値や電流値を測定するためには外部測定器を使用してください。
- 出力時間間隔をExcelシートから取得し、毎回出力時間間隔が変更されるような場合、測定遅延時間の欄を空欄にしておく、常に出力時間の末尾で測定が行なわれます。
- 注)「測定時間間隔」「測定遅延時間」は、あくまでも目安の時間で、正確さを保証するものではありません



- 「START」ボタンで、現在のExcel上カーソル位置を先にして、下に向かって順次データの制御を開始します。制御値の全セルが空欄になると終了します。繰り返し回数が1回以上の場合は、上記を繰り返します。
- 「PAUSE」ボタンを押すと、一時停止します。再度「PAUSE」ボタンを押すと連続モードに戻ります。
- 「PAUSE」を先に押してから、「START」を押すと、ステップモードになり、「START」を1回押す毎に、制御データを次に進めます。「PAUSE」を解除すると、連続モードに戻ります。
- 「PAUSE」モードの時、測定は「START」を押すか、また「PAUSE」解除したときに実行されます。
- 「STOP」ボタンで、いつでも中断できます。
- Excelシートの表示を切換えます。
- Excelシート上のカーソルの位置を移動させます。
- 各ステップの出力時間間隔が一定時間間隔の場合、その時間を入力します。「Excelシートから」にチェックを付けると、この入力は無視されます。入力値の最大は3600秒です。この欄に「0」の入力も可能ですが、実際の最速の時間間隔は、測定を行わない場合で約10回/秒程度です。また、リードバックによる電圧・電流のどちらかの測定にチェックをつけた場合、約2回/秒程度になります。
- 制御値と同時に、出力時間間隔もExcelシートから取り込む場合にチェックします。時間間隔値は、制御値の1つ右の例に入力します。(前ページ参照)
- 入力された条件を全て保存及び読込をします。
- PIA4830のGP-IBアドレスを設定します。
- 出力の繰り返し回数を入力します。全てのデータの出力が終了したら、スタート位置に戻り、再度繰り返し出力を行います。繰り返しの最大は250回ですが、測定値の入力がExcelシートの右端に到達すると停止します。
- 出力ONからの経過時間もExcelに取り込みます。
- マルチメータなどの外部測定器のデータも同時に取り込みます。(詳細は後述参照)

## 出力制御の停止条件を設定します。



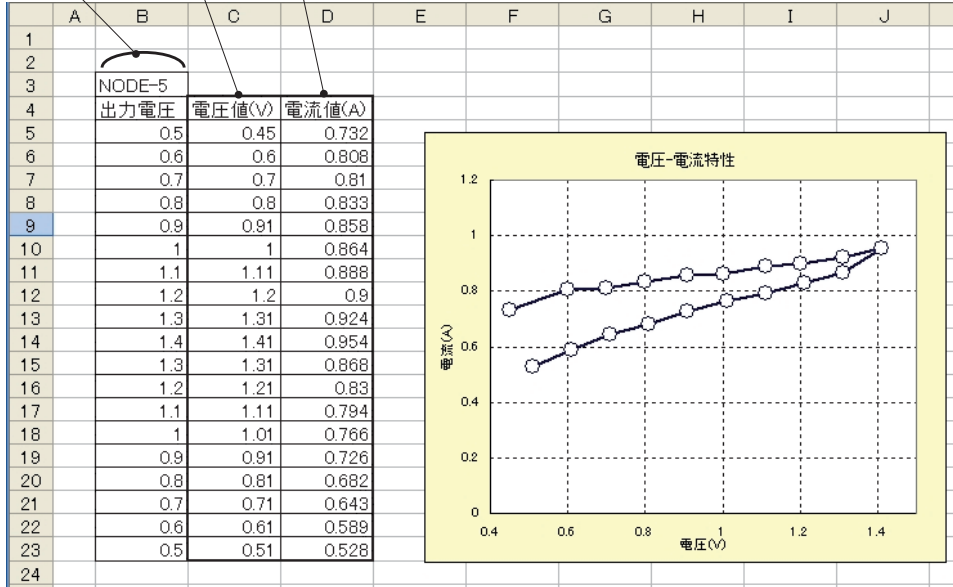
- DC電源装置のモード移行を検出して、制御動作を緊急停止させることができます。「CCモード」への移行「CVモード」への移行
- リードバックによるそれぞれ ぞれの測定値に対して出力停止条件を設定できます。それぞれの測定項目に上限値/下限値の許容範囲を入力し、その範囲を外れた場合、その時点で制御動作を自動的に終了します。空欄の場合は、その項の判定は無視します。これらの終了判定は、リアルタイムに反応するわけではありません。入力された出力時間間隔ごとの測定値に対して、判定が行われます。
- また、判定をする各項目は、必ずその測定項目をONに設定しておく必要があります。
- 外部測定器の測定結果に対しても出力動作の停止条件を設定できます。外部測定器の場合、演算がONの場合、演算後の値に対し判定が行われます。
- 停止条件が発生したとき、その内容表示を行なう必要が無いならチェックを付けます。

## 出力制御を実行し、その測定値をExcelへ取り込んだ例

スタート前に、事前にExcelシートに入力しておいた制御値

ノード5の電源装置のリードバック電圧の測定値

ノード5の電源装置のリードバック電流の測定値



## 外部測定器(マルチメータ等)の設定方法

外部測定器とはGP-IBでパソコンと接続されている必要があります。(下図)

外部測定器から送られてくるデータのフォーマットは、ASCIIであり、複数のデータの場合(Max10個)、データ間はコンマで区切られている必要があります。

注)外部測定器からのデータ取り込みは、全ての測定器との通信を保証するものではありません。

外部測定器のGP-IBアドレスを設定します。

測定器のデリミタを設定します。通常は、LF+EOIです。

測定開始前に、測定器に送信するコマンドがある場合は、ここに入力します。ファンクションやレンジ切替えのコマンドを入力します。通常は空欄です。

もし、外部測定器からデータを受け取る時、クエリコマンドを事前に送信する必要がある時、ここに送信するクエリコマンドを入力します。ほとんどの場合、空欄でOKです。

もし、マルチメータがSCPIコマンド準拠のものでしたら、下記のコマンドのどれかが使用されます。

:READ? :FETCH? :MEAS?

外部測定器のデータ受信時にトリガが必要な時、チェックをつけます。

「GET」、「\*TRG」、「任意コマンド」からトリガの方法を選択します。

通常は、「GET」の選択をします。

「任意コマンド」を選択した場合は、トリガコマンドをテキストボックスに入力します。

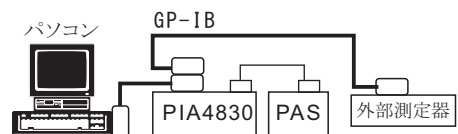
外部測定器のデータに演算処理を行うときにチェックします。複数のデータが受信された場合は、その全てのデータに、下記に入力した演算が行われます。

取り込んだデータに、下記演算を行った後、Excelへ入力します。

Excelへの入力値 = (測定器データ - B) \* A

ヘッダとしてExcelへ入力する事項をここに入力します。

空欄の場合、「外部測定器」が入力されます。



接続例